

研究概要報告書【サウンド技術振興部門】

(/)

研究テーマ	森林空間での音楽演奏が演奏者と聴衆にもたらす心理的影響と媒介的機能	報告書作成者	中村 和彦
研究従事者	中村 和彦		
研究目的	音楽には様々な演奏形式が存在するが、その起源には当時の社会状況が反映されている。例えば、1 声部に 1 人の独奏者を配して数名が重奏する演奏形式である室内楽は、16 世紀における王侯貴族の館での演奏が起源とされる。この室内楽をはじめとする屋内での演奏は、いわゆるクラシック音楽の主要な演奏形態として、その社会的・時代的文脈からほとんど解放された現代まで頻繁に、もはや当たり前のように行われてきた。しかし、先のコロナ禍により一時的に屋内での演奏が社会的に断たれたため、クラシック音楽の演奏家たちが屋外における演奏の可能性を模索する機会が生じた。 そのような折、NHK 交響楽団所属の弦楽器奏者らが、2020 年 8 月に東京大学富士癒しの森研究所の森林内において室内楽形式の演奏を試行した。その後、従来の屋内演奏が社会的に再開されて以降も、同奏者らによる同地での森林内演奏は毎年度継続して実施されている。富士癒しの森研究所は、前身の富士演習林として 1925 年に設立以降、約 100 年にわたり学術的な知見に基づく森林管理が継続されており、特に現在は「癒し」に関する研究のための森林空間が整備されている。こうした快適性の高い森林空間の存在が、伝統的な室内楽の演奏形式を野外に持ち出すことを可能とし、結果として森林と音楽の双方にとって新たな価値創出が示唆される活動が生まれたと捉えられる。 そこで今回の助成による研究では、この森林における弦楽器演奏を事例として、森林空間における音楽演奏という事象がもたらす演奏者および聴衆への心理的影響を明らかにし、人々が生活の中で屋外空間をより豊かに楽しむための媒介的機能という音楽の新たな価値について考察することを目的として、実証実験を進めている。具体的には、森林空間(屋外)と音楽ホール(屋内)で、同演奏者・同編成・同曲目での音楽演奏を行い、演奏者および聴衆の心理状態を質問紙調査およびインタビュー調査により比較検討する。		

研究内容	NHK 交響楽団所属奏者の弦楽三重奏(ヴァイオリン:大宮臨太郎／ヴィオラ:坂口弦太郎／チェロ:山内俊輔)による森林内演奏は、これまで 2020 年 8 月、2021 年 6 月、2022 年 7 月の 3 回にわたり実施された。これらはいずれも、付近の道路を走行する車両のエンジン音が日中に比べて少ないことを見込んで、早朝あるいは夜間に時間帯を設定して行われた。 演奏者は元来、自身の演奏に対して聴衆がどのような聴き方(反応)をしているかについて、とても敏感であり、随時それを感じ取りながら演奏をしている。屋内演奏では、聴衆があまり演奏に興味を示さなかったり、ともすると寝入ってしまったりすることもあるが、こういった聴衆の反応は当然ながら演奏者からしても辛いようである。しかし、森林内での演奏においては、聴衆が退屈することなく気持ちよさそうにしていたため、演奏者としても心地よく演奏できたようだった。これは森林空間の心理的影響が聴衆を介して演奏者にも波及したと考えることができる。また、今回の演奏者各氏は、これで計 4 回の森林内演奏を経験したことになり、環境や響きの特性に慣れたてきたことも伺えた。 これらを踏まえて今回の助成による研究について同氏らと相談した結果、早朝の時間帯における『ゴルトベルク変奏曲』(J.S.バッハ作／弦楽三重奏編曲版)を演奏することとなった。これを受けて、森林空間(屋外)における演奏は、2023 年 7 月 16 日(日)午前 6 時より、東京大学富士癒しの森研究所(山梨県山中湖村)の森林内にて行い、約 200 名の聴衆が参加した。これにできるだけ合わせる形で、音楽ホール(屋内)における演奏は、2023 年 10 月 9 日(月・祝)午前 10 時より、オーキッドミュージックサロン(東京都世田谷区)のホールにて行い、約 30 名の聴衆が参加した。 聴衆への影響については、記述式のアンケート調査による質的把握を試みた。主な質問項目は次の 2 点とした。 ・演奏に対して何を感じたり、行動したりしましたか？ ・森に対して何を感じたり、行動したりしましたか？ 演奏者への影響については、インタビューと録画分析によって、演奏者の心理状態およびその表出としての演奏に森林空間と音楽ホールでどのような差異が見られるかを検討した。
------	---

研究のポイント	聴衆への影響については、森林空間が聴衆の演奏聴取に各種の心理的影響を及ぼす一方で、聴衆の森林認識に対して演奏が媒介的機能を果たした部分もあり、演奏と森が相互に分かちがたく一体化していることが示唆された。屋内演奏においては、聴衆にとって演奏を聴く以外の行動は実質的に制限された状態となるため、演奏以外に対する具体的な記述は見られなかった。 演奏者への影響については、森林内での演奏においては聴衆が退屈することなく気持ちよさそうにしていたことを受けて、演奏者としても心地よく演奏できたという趣旨の発言があった。録画の比較では森林空間と音楽ホールとで演奏姿勢や弓の使い方、テンポの設定などに対して、空間の差異が影響を及ぼす可能性がみられた。 以上のように、今回の助成による研究に際して仮説として想定していた、森林空間での音楽演奏がもたらす心理的影響と媒介的機能は、演奏者と聴衆のいずれに対しても定性的に認められた。
研究結果	聴衆への「演奏に対して何を感じたり、行動したりしたか」に対する主な回答は次のとおりである。 鳥のさえずりと朝日もれ日がうつろう様子と音色の変化が相まって感動した。／お日さまと鳥と森林との一体感を感じた。／森の中で弦楽器の響きが、やわらかく共鳴して、音楽が心の中に入った。／鳥のさえずりと演奏のコラボレーションが何とも言えない美しさを感じた。／静かな朝の森にふさわしい選曲と演奏で日頃感じていなかった森の良さが心を打った。／森の木々のにおいと奏でられる音と新緑の色とが一体となってコンサートホールで聴くよりも肌で感じられてよかった。 聴衆への「森に対して何を感じたり、行動したりしたか。」に対する主な回答は次のとおりである。 鳥たちも気持ち良さそうに演奏をきいていたと感じた。森と一体となっていたように思った。／森と鳥達と共に音楽を聴けた。／少しずつ日がさしてくる様子を音楽の移ろいと共に感じた。／自然の中でできることは自分が思っているよりたくさんあるのだろうと感じた。
今後の課題	今回の結果は、音楽演奏・聴取の新たな形式の可能性を示唆すると同時に、森林空間のさらなる活用可能性を示唆するものでもある。森林の空間的活用という点では昨今、ともすると心身の回復効果(森林セラピー)に主眼が置かれがちであるが、森林は古くから音楽をはじめ芸術活動における靈感の源でもあったように、まだ科学的に記述できていない多様な側面があると考えられる。今後、森林空間のさらなる活用可能性を科学的に見出すことを目指して、従来の森林科学における森林空間の呼称である「林内」を援用し、森林空間における室内楽形式の音楽演奏を「林内楽」(りんないがく)と称して、引き続き実施していきたいと考えている。



森林内演奏(左写真)と室内演奏(右写真)



森林空間と音楽演奏により相互補完的に示唆される両者の新たな可能性